

近世期の人麻呂・赤人受容の一端

——鶴岡市郷土資料館蔵の二歌集について——

一、はじめに

鶴岡市郷土資料館蔵『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』、『萬葉集山部赤人歌』を翻刻紹介するにあたって、当該二歌集の性格を二つの点から概観しておきたい。その一つは、江戸期における柿本人麻呂、山部赤人の存在とその両者の作品の位置づけである。これについては、先に公表した河野美術館蔵『柿本朝臣 山部宿禰歌集』の紹介の中で、次のような指摘を行った。

・柿本人麻呂、山部赤人は、『古今和歌集』序にその名を紹介され、三十六歌仙にも選ばれた。とりわけ人麿は、歌仙、歌神として信仰され続ける。そのような中で、『人麿集』、『赤人集』が平安期に既に成立し、種々の本が伝存することとなった。

・『萬葉集』は近世期に実証的な研究が進み、柿本人麻呂や山部赤人についても、伝説に基づくものではなく、『萬葉集』の内部徴証から把握しようとする動きが現れてくる。河野美術館蔵『柿本朝臣 山部宿禰歌集』も、近世期の『萬葉集』研究の中で、従来の『人麿集』や『赤人集』とは違った、より正確な歌集を求めて製作されたものと思われる。

・江戸後期には、河野美術館蔵『柿本朝臣 山部宿禰歌集』と同じく人麻呂と赤人の作歌を『萬葉集』から抄出した歌集がいくつか作られたように、『二聖歌集』、『人麿赤人歌集』、『二大人集』などが天明期から安政期に作られたことが知られている²⁾。それらはいずれも『古今集』序の和歌史観に立ちながら、『古今集』尊重の時代に生みだされた私家集の『人

朝比奈 英夫
藤田 洋治
池原 陽 齋

麻呂集』、『赤人集』を批判的に捉えて編まれたものと見てよからう。鶴岡市郷土資料館蔵の二歌集も、右のような江戸期の動向の中で製作されたものと考えられる³⁾。両歌集の内実については後節で紹介するが、その性格は賀茂真淵の学を受け継ぐ加藤(橘)千蔭の『萬葉集略解』(寛政八年〔一七九六〕刊)の影響下の成り立つものと言ってよい。国学の深化と伝播の潮流が出羽地方に及び、この両歌集を生み出したのである。そこで注意されるのが、この二歌集が制作された地域的な背景である。これが概観すべき第二点である。以下、節を改めて、この点について解説したい。

二、佐藤家と『五峯館蔵書』と書誌

出羽国の日本海側に広がる庄内平野は、江戸時代には日本の代表的な米作地帯として栄え、庄内藩は徳川四天王の一つである酒井家が藩主として明治まで続いた。米どころの庄内平野をもち、また酒田は北前船の寄港地として栄えた庄内地方であるが、文化面にも見るべきものがあった。五代藩主忠真は、五代將軍綱吉の前で論語を講じているし、室鳩巢を養子忠寄の教育のために藩邸に幾度か招いている。

七代藩主忠徳は、藩政改革をして藩の財政を立て直したことで知られているが、文化九(一八一二)年に藩校致道館を創設し、また、和歌を好んだことでも知られる。この時期に至り、庄内藩にも和歌文学の気運が高まってくる。女流歌人・杉山廉やその周辺に集まった白井固・池田玄斎・建部山比古

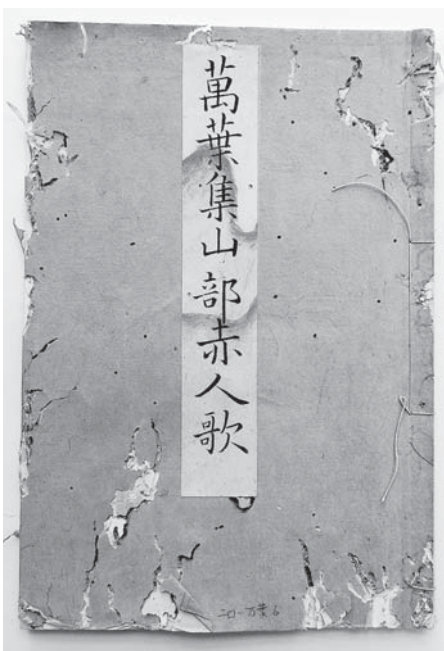
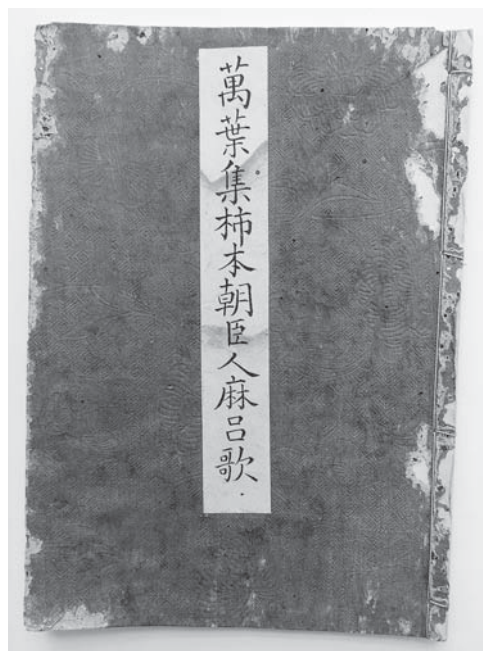
などが和歌を詠み、また周辺に広めていった。他方、国学のほうも受け入れられ、鶴岡に隣接する天領の大山地区（現鶴岡市）では、鈴木重胤を幾度か招いて、その学問を学ぶという風土でもあった。⁴ 実際、それぞれ個人の歌集も残っているが、『百人一首略解』（白井重固）、『古今和歌集遠鏡補正』（中村知至）、三代集の注釈書『古今老のすさび』、『後撰老のすさび』、『拾遺老のすさび』（服部正樹）などの注釈も残っている。

さて、この度採り上げた『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』『萬葉集山部赤人歌』を所蔵する佐藤家は、鶴岡より二里ほど離れた天領の角田二口村（現三川町）で代々名主を勤めた家柄で、一時期は造り酒屋なども行なうなど、比較的裕福な家であった。⁵ 佐藤家の記録は『角田二口文書』として知られ、その蔵書は、『五峯館蔵書』⁶として現在鶴岡市郷土資料館に収蔵されている。千五百を超える冊数の書籍が収蔵され、内容は漢籍、儒学書、和歌、絵画、俳諧、書道、往来物と多岐にわたっている。これらの書物は九代目東藏貞教（宝暦八（一七五七）年～文化五（一八〇八）年）と一〇代目市右衛門孚兎（明和八（一七七二）年～文政八（一八二五）年）が学問に熱心で収集されたものを中心と言われている。この二人は、ともに庄内藩の儒学者和田判兵衛（享保一三（一七二八）年～文化一一（一八一四）年）に師事しており、また一〇代市右衛門孚兎は藩の右筆で歌人でもあった建部山比古（安永七（一七七八）年～天保一〇（一八三九）年）にも師事し、二人の交流を示す手紙も残っている。武士階級と富裕な農民や商人が相互に交流していたこともこの時代の特徴と言えるだろう。このようなことから蔵書には、国学関連の書物も多く、『萬葉集』に関しても、文化九年刊『萬葉集』、『万葉集檜之落葉』、『万葉集中旋頭歌』などとともに、『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』『萬葉集山部赤人歌』も収蔵されているのである。湯川真人氏は、この蔵書群を「佐藤家の歴史において、九代東藏以前に学問や文化的活動を行なった形跡を示す史料は殆どなく、東藏に至って漢籍・儒学書を読書し、市右衛門、善三郎と代が下るにつれ文化活動の内容も漢詩、和歌、絵画、俳諧と裾野を拡げ、蔵書も収集範囲も多岐にわたってきている」と把握している。⁷

このような蔵書の中に『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』『萬葉集山部赤人歌』が含まれるのだが、この二冊の筆者が一〇代市右衛門であるのか、誰が書き

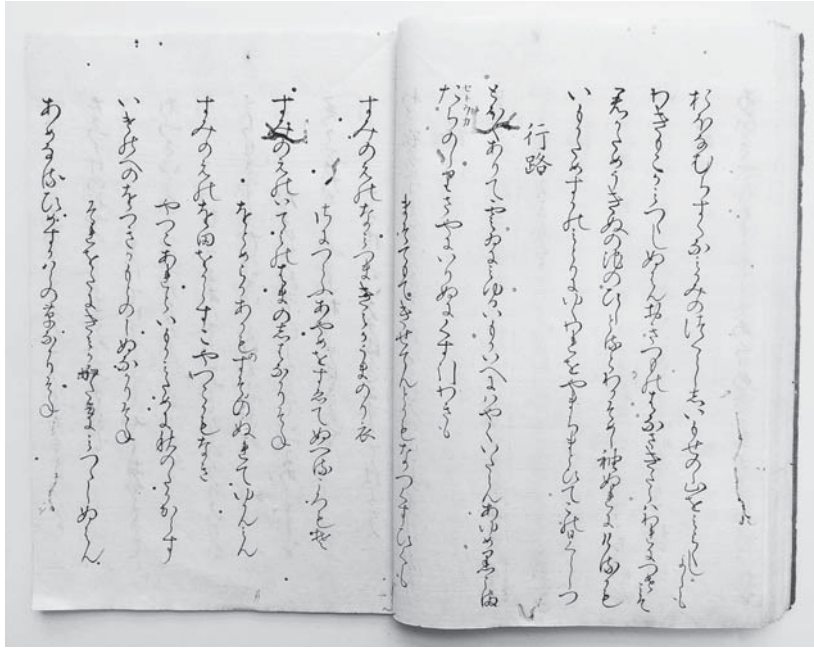
記したものなのか、奥書もなく、筆跡が残っていない現状からは判断するすべがない。この二本は、ともに角田二口文書内『五峯館蔵書』『万葉集六』の箱に収められている。⁸ 函架番号はない。それぞれの伝本の書誌について簡単に触れておきたい。『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』、『萬葉集山部赤人歌』はともに江戸後期の写で、万葉集から当該歌人の和歌を抽出した歌集である。

『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』は、袋綴、大きさは縦二三・六×横一六・七センチ、表紙は薄縹色、遊紙はなく全二二丁、奥書も見られない。本文は和歌一行書きで、一面九行である。一方、『萬葉集山部赤人歌』は、袋綴、大きさは縦



二三・八×横一六・三^セ、表紙は香色、やはり遊紙はなく全一〇丁で、同じく奥書はない。本文は原則和歌一行書き（一部、二行書きの部分も見られる）で、一面九行である点は『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』と一致するが、一部、反歌を上句下句の二行書きにしている箇所が見られる。また両本の筆跡は一致し、同一人物によるものと考えられる。

三、本文の性格



本集の本文は『萬葉集略解』の訓の影響下にある。^①『略解』は『萬葉集』の平易な入門書として広く読まれた本で、安政三年（一八五六）には再刻本が刊行^②されている。また、以降もながく流通し、後印本が大正初年まで流通していたという証言もある。^③

近世後期に流布したテキストとしては、ほかに『萬葉考』がある。千蔭の師・賀茂真淵の著作で、明和五年（一七六八）に刊行され、やはり明治時代に後印本が出ている。^④『萬葉考』は独自の改訓を多くなしたことで知られるが、『略解』はこの改訓を踏まえ、さらに独自の訓を示す場合が少なくない。本集を見ると、

この『略解』独自訓に依拠する本文が五十五箇所はある（傍書の訓、注記中の訓をふくむ）。とくに『略解』からの影響を明瞭に指摘しうるのは以下の三例である。本集・寛永版本本文・同本附訓の順に掲出した。

①人麻呂96／巻七 1275
すみのえのを田をからすこやつこかもなき やつこあれといもかみため
に秋のたからす

住吉 小田苅為子 賤鴨無 奴雖在 妹御為 私田苅
スミノエノヲタカラスルコイヤシカモナシ ヤツコアレトイモカミタ
メニシノヒタヲカル

②人麻呂99／巻七 1278
なつかけのねやのしたにきぬたつわきも うらまけてわかためた、は
や、おほにたて

夏影 房之下庭 衣裁吾妹 裏儲 吾為裁者 差大裁
ナツカケノネヤノシタニテコロモタツワキモ ウラマケテワカタメ
タ、ハヤオホキニタテ

③人麻呂124／巻七 1304
あま雲のたなひく山のこもりたる わかした心このはしるらん

天雲 棚引山 隠在 吾忘 木葉知
アマクモノタナヒクヤマニカクレタル ワレワスレメヤコノハシルラ
ム

①の結句は寛永版本に「私田刈」とあり、近世の諸注では「ワタクシタカル」（荷田春満『萬葉集童蒙抄』）、「オノレタカラス」（『萬葉考』）と本文に即した試訓がなされていたが、『略解』は「私」を「秋」の誤写とし、「あきのたからす」とする。本集の本文はこの誤写説による訓と同一であり、『略解』に依拠していることは疑いない（「たからす」とあるのは衍字であろう）。

②の第二句も、契沖『萬葉代匠記（精撰本）』が「房之下庭」の本文のまま「ネヤノモトニテ」と改訓したが、『略解』は「庭」を「迹」の誤写と判断する。訓は「ねやのしたに」で、やはり本集と同様である。

なおこの『略解』の誤写説は、元暦校本・古葉略類聚鈔・廣瀬本・紀州本といった古写本にも「迹」とあったことよって、現在では通説として追認

されるにいたっている（現行訓は「ツマヤノシタニ」）。

③の第四句に関しては、近世に誤写説と試訓が多く提出されている。口火を切ったのは『代匠記（初稿本）』で、「忘」を「志」の誤写と考え「ワカコ、ロサシ」とする。また『童蒙抄』も「己心」と、本文・訓をともにあらためている。問題の『略解』も宣長の説を引いて、「忘」を「下心」の誤りとみとめ、「わかしたこゝろ」に改訓する。この案は現在でこそ通説となっているが、近世後期の時点では新説であり、本集が「わかした心」とするのも『略解』の影響によるのであろう。

ほかに、「常宮等」（巻六九七第三句）を「とつみやと」（赤人23）、「高所知流」（巻六九八第四句）を「たかしらしぬる」（赤人33）とする例なども、前者は本文「常」を「とつ」と漢字の即さず五音相通に読む点、後者は従来の「タカクシラセル」（寛永版本・仙覚訓）や『萬葉考』の「タカシラスル」との相違が著しい点に『略解』の独自性が看取しうる。このような改訓を本集が反映することも、『略解』の影響を保證する材料といつてよいであろう。

しかし、以上のような特徴を根拠として、本集を『略解』自体から訓を抜き出し、仮名歌集に仕立てものと考えてよいかといえ、おそらくそうはいえない。本集には『略解』の訓（傍書の訓・注記中の訓をふくむ）と相違する本文が五十一箇所ほどあるが、そのなかには、意図的に『略解』の訓を訂正したというよりも、『萬葉集』の本文を見ていなかっただめに誤認したのではないかと判断しうる例が相当数見出せるからである。本集『略解』本文・『略解』訓の順に、そう判断しうる例を掲出する。

④人麻呂16／巻二131

……いさなとり うなひをすきて きたたつ ありそのうへの……
……鯨魚取 海邊乎指而 和多豆乃 荒磯乃上爾……

⑤人麻呂16／巻二131

……いさなとり うなびをさして にぎたづの ありそのうへの……
……よろつたひ かへりみすれば いやとほに さとはさかりぬ……

……萬段 顧爲騰 彌遠爾 里者放奴……
……よろづたび かへりみすれど いやとほに さとはさかりぬ……

⑥人麻呂19／巻二135

……つまこもる やかみのやまの この間より わたらふ月の……

……孀隱有 屋上乃一云、室上山山乃 自雲間 渡相月乃……

……つまごもる やがみのやまの くもまより わたらふつきの……

⑦人麻呂30／巻二199

……おほみてに ゆみとりわたし みいくさを あともひたまひ……
……大御手爾 弓取持之 御軍士乎 安騰毛比賜……

……おほみてに ゆみとりもたし みいくさを あともひたまひ……

⑧人麻呂33／巻二203

ふる雪はあはになふりそよなはりの あかひのをかのせきならなくに
零雪者 安幡爾勿落 吉隱之 猪養乃岡之 塞爲卷爾

ふるゆきはあはになふりそよなばりの むかひのをかのせきならまくに

⑨赤人41／巻六946

……おきへには ふかみるおふる うらまには なのりそかる……
……奥部庭 深海松採 浦回庭 名告藻荇……

……おきへには ふかみるとり うらまには なのりそかる……

この六例は、いずれも本集の本文と『略解』の訓が相違しているというよりも、『萬葉集』の本文と乖離し、かつ単独の歌詞としては意味の通じるものとなっている。たとえば④の「うなひをす（過）きて」は「海邊乎指而」という本文とは照応しないが、歌句の意味を理解することは容易である。「指」を「すきて」と理解するとは考えにくいから、本集の書写者は本文を見ていなかった可能性がたかい。

以下も同様の例で、⑤「かへりみすれば」と「騰」、⑥「この間より」と「雲」、⑦「ゆみとりわたし」と「持」、⑧「せきならなくに」と「卷」、⑨「ふかみるおふる」と「採」は、いずれも『萬葉集』の漢字と本集の本文が対応していない。しかし、個々の歌句としては意味が取れないわけではなく、このような本文が成立した要因は、漢字本文を見ていなかったという点に求めるべきではないだろうか。

この点と関わっては、成句「わこおほきみ」も注目に値する。『萬葉集』には「和期大王」（巻一52）のように、仮名表記で「わが」ではなく「わご」と訓むことを指示する例が十一ある。そのうち四例は赤人歌であるため本集

にも採られているが、その様相は以下のとおりである。

赤人23 (巻六917) やすみしし わかおほきみの……

赤人26 (巻六923) やすみし、 わかおほきみの……

赤人29 (巻六926) やすみしし わかおほきみは……

赤人31 (巻六933) ……わかおほきみ くにしらすらし……

『略解』は当然、本文「和期」に即していずれも「わか」とするが、本集では「わか」と「わか」が混淆している。この混淆に意図を見出すことは困難であり、赤人23と29は単純な誤写と見做してよいであろう。やはり漢字本文「和期」を見ていた場合には起こりにくい誤写とおほしく、本集が直接『略解』には当たらなかった可能性を示唆している。

また、訓みの相違には直接かわからない例であるが、以下の五首も注目すべき表記となっている。

……おほふねの わたりのやまの 紅葉の ちりのまかひに……

(人麻呂19／巻二135)

あきやまの紅葉をしけみまとはせる 妹をもとめんやまちしらすも

(人麻呂38／巻二208)

紅葉、のちりぬるなへに玉つさの つかひを見ればあへるひおもほ

(人麻呂39／巻二209)

わか衣色にそめなんうまさけを みむろの山は紅葉しにけり

(人麻呂82／巻七1094)

雲かくりかりなくときは秋山の 紅葉かたまつときはすくれと

(人麻呂149／巻九1703)

いずれも「もみち」を「紅葉」と書くが、周知のとおりこの表記は『白氏文集』などの影響によって平安朝以降一般化したもので、『萬葉集』では六朝初唐詩の書き様にもとづく「黄葉」の表記が圧倒的である。¹³前掲五首も『萬葉集』ではすべて「黄葉」と表記されており、本文を見ていたとすれば、「紅葉」と書くとは考えにくい。当時の通行表記を、とくに意識もせずにもちいたのであろう。¹⁴

以上のように、本集は『略解』の改訓を踏まえつつも、『略解』の訓と相違する、というよりも、『萬葉集』の漢字表記そのものと乖離した例が複数

確認できる。このような特徴によれば、本集の書写者は『略解』に直接当たっていない可能性がたかい。

赤人集3の長歌の後ろ、「反歌」という題詞の右下に「右壹首高橋連蟲麻呂哥誤コ、二出ス」との注記があり『略解』の記述と合わないこと、人麻呂歌集の採取が不完全であることを考慮すると、当初作られたのは『略解』の訓を抜き出した『萬葉集』抄本で、そこから人麻呂、赤人に関する歌のみを抜き出そうとしたのが現存の二集なのではないだろうか。採取元の抄本が仮名本であったとすれば、ここまで指摘してきた本文上の特徴ともよく照応する。少なくとも、本集は『略解』を直接参照して作られたものではないとみてよいであろう。

四、翻刻 『人麻呂歌・赤人歌 鶴岡市郷土資料館本』

【凡例】

一、鶴岡市郷土資料館所蔵『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』及び『萬葉集山部赤人歌』を、そのまま翻刻したものである。本文中、万葉集の巻数を記しているが、和歌と同じ高さであるので、そのまま和歌と同じ高さとし、また題は一字下げた形であるので、原本に倣って、一字下げとして翻刻し、冒頭から順に歌番号を付した。

二、漢字仮名を原稿の文字にそのまま移し替え、原則として旧漢字、異体字は使用していない。なお、原本では長歌の冒頭に朱の合点記号を付すが、割愛した。

三、仮名遣いに関しては、原本の使用した文字をそのまま使用し、濁点も書入もそのまま使用した。また、長歌は句ごとに空白を入れて示した。

題簽 「萬葉集柿本朝臣人麻呂歌」 (表紙・中央)

萬葉集柿本朝臣人麻呂歌

1 たまたすき うねひのやまの かしはらの ひしりのみよゆ あれまし、かみのことく つかのきの いやつきくに あめのしたし

- ろしめし、を そらにみつ やまとをおきて あをによし ならやまを
こえ いかさまに おもほしめせか あまさかる ひなにはあれと い
は、しの あふみのくにの さ、なみの あふつのみやに あめのした
しろしめしけん すめるきの かみのみことの おほみやは こ、と
きけとも おほとのは こ、といへとも はるくさの しけくおひたる
かすみたつ はる日のきれる も、しきの おほみやところ みれば
かなしも
- 2 さ、なみのしかのからさきさきくあれと 大宮人のふねまちかねつ
3 さ、なみのしかのおほわたよとむとも むかしの人にまたもあはめや
も
- 4 やすみし、 わかおほきみの きこしをす あめのしたには くにはし
も さはにあれとも やまかはの きよきかふちと みこ、ろを よし
の、くにの はなちらふ あきつ、へに みやはしら ふとしきませ
は も、しきの おほみやひとは ふねなめて あさかはわたり ふな
きほひ 夕かはわたる このかはの たゆることなく このやまの い
やたかからし いは、しる たきのみやこは みれとあかぬかも
5 見れとあかぬよしの、かはのとこなめの たゆることなくまたかへり
みん
- 6 やすみし、 わかおほきみ かなから かんさひせすと よしのかは
たきつかふちに たかとのを たかしりまして のほりたち くにみ
をすれは た、なはる あをかきやまの やますみの まつるみつきと
はるへは はなかさしもち 秋たては もみちかさせり 夕かはの
かみもおほみけに つかへまつると かみつせに うかはをたて しも
つせに さてさしわたし やまかはも よりてつかふる かみのみよか
も
- 7 やまかはもよりてつかふるかなから たきつかふちにふなせずかも
8 あこのうらにふなのりすらんをとめらか たまものすそにしほみつら
んか
- 9 くしろつくたふしのさきにいまもかも 大宮人のたまもかるらん
10 しほざるにいらこのはまへこくふねに いものるらんかあらしまわ
- 11 を
やすみし、 わかおほきみ たかひかる 日のみこ かなから かん
さひせすと ふとしかす みやこをおきて こもりくの はつせのやま
は まきたつ あらやまみちを いはかねの しもとおしなへ さかと
りの 朝こえまして かきろひの 夕さりくれば みゆきふる あきの
おほぬに はたす、き しのをおしなへ くさまくら たひやとりせず
いにしへおもひて
- 12 秋のぬにやとるたひ、と打なひき いもぬらめやもいにしへおもふに
13 まくさがるあらぬにはあれともみちはの すきにし君かかたみとそこ
し
- 14 ひむかしのぬにかきろひのたつみえて かへりみすれば月かたふきぬ
15 ひなめしのみこのみことのうまなへて みかりた、ししときはきむか
ふ
- 二卷
- 16 いはみのみ つぬのうらまを うらなしと ひとこそ見らめ かな
しと 人こそみらめ よしゑやし うらはなけとも よしゑやし かな
はなけとも いさなとり うなひをすきて きたつ、ありそのうへ
の かあをなる 玉もおきつも 朝はふる かせこそよせめ 夕はふる
なみこそきよれ なみのむた かよりかくより 玉もなす よりねし
いもを つゆしもの おきてしくれば このみちの やそくまことに
よろつたひ かへりみすれば いやとほに さとはさかりぬ ましたか
に やまもこえきぬ 夏草の おもひしなえて しぬふらん いもかと
みん なひけこのやま
- 17 いはみのやたかつの山のこのまより わかふる袖をいもみつらんか
18 さ、のは、みやまもさやにさわけとも われはいも思ふわかれきぬれ
は
- 19 つぬさはふ いはみのうみの ことさへく からのさきなる いくりに
そ ふかみるおふる ありそにそ 玉もおふる たまもなす なひき
ねしこを ふかみるの ふかめておもへと さぬるよは いくらもあら
す はふつたの わかれしくれば きもむかふ 心をいたみ おもひ

- つ、かへりみすれとおほふねのわたりのやまの紅葉のちりの
まかひに いもか袖 さやにもみえず つまこもる やかみのやまの
この間より わたらふ月のをしけとも かくろひぬれは あまつたふ
入日さしぬれ ますらをとおもへるわれも しきたへの 衣の袖は
とほりてぬれぬ
- 20 あをこまのあかきをはやみ雲ゐにそ いもかあたりをすきてきにける
21 秋やまにおつるもみちはしまらくは なちりみたれそいもかあたりみ
ん
- 22 あめつちの はしめのときし 久かたの あまのかはらに やほよろつ
千よろつかみの かんつとひ つとひいまして かんばかり はかり
し時に あまてらす ひるめのみこと あめをは しろしめすと あし
はらの みつほの国を あめつちの よりあひのきはみ しろしめす
かみのみこと、天雲の やへかきわけて かんくたり いませまつり
し たかひかる 日のみこは あすかの きよみのみやに かむなから
ふとしきまして すめろきの しきます国と あまのはら いはとを
ひらき かむあかり あかりいましぬ わかおほきみ みこのみことの
あめのした しろしめしせは はるはなの たふとからんと 望月の
た、はしけんとおめのした よもの人の おほふねの おもひたの
みて あまつみつ あふきてまつに いかさまに おもほしめせか つ
れもなき まゆみのをかに 宮はしら ふとしきいまし みあらかを
たかしりまして 朝ことに みこととはさす つきひの まねくなりぬ
る そこゆゑに みこのみや人 ゆくへしらすも
- 23 久かたのあめみることくあふきみし みこのみかとのあれまくをしも
24 あかねさす日はてらせれとぬは玉の よわたる月のかくらくをしも
25 とふとりの あすかのかはの かみつせに おふる玉もは しもつせに
なかれふらはへ 玉もなす かよりかくより なひかひし つまのみ
ことの た、なつく やははたすらを つるきたち みにそへねぬは
ぬは玉の よとこもあるらん そこゆゑに なくさめてける しきもあ
ふ やと、おもひて 玉たれの をちのおふぬの 朝つゆに たまもは
ひつち ゆふきりに 衣はぬれて 草まくら たひねかもする あはぬ
- 26 君ゆゑ
27 君ゆゑ
28 君ゆゑ
29 君ゆゑ
30 君ゆゑ
- 26 しきたへの袖かへしきまたまたれの をちぬにすきぬ又もあはめやも
27 とふとりの あすかのかはの かみつせに いは、しわたし しもつせ
に うちはしわたし いは、しに おひなひける 玉も、そ たゆれは
おふる うちはしに おひを、れる かはも、そ かるれはゆるな
にしかも わかおほきみの た、せは たまものごとく ころふせは
かはものごとく なひかひし よろしき君か あさみやを わすれたま
ふや ゆふみやを そむきたまふや うつそみとおもひしときに は
るへは はなをりかさし 秋たては もみちはかさし しきたへの そ
てたつさはり か、みなす みれともあかす 望月の いやめつらしみ
おもほしし 君とをりく いてまして あそひたまひし みけむか
ふ きのへのみやを とこみやと さためたまひて あちさはふ めこ
ともたえぬ しかれかも あやにかなしみ ぬえとりの かたこひつま
あさとりの かよはず君か なつくさの おもひしなへて 夕つ、の
かゆきかくゆき おほふねの たゆたふみれは なくさもる 心もあ
らす そこゆゑに すへしらしや おとのみも なのみもたえす あ
めつちの いやとほなかく しぬひゆかん みなにか、せる あすか、
は よろつよまてに はしきやし わかおほきみの かたみかこ、を
あすか、はしからみわたしせかませは なる、みつものとかあら
まし
- 28 あすか、はしからみわたしせかませは なる、みつものとかあら
まし
- 29 あすからはあすたにみんなとおもへやも わかおほきみのみなわすれせ
ぬ
- 30 かけまくも ゆ、しきかも いはまくも あやにかしこき あすかの
まかみのはらに 久かたの あまつみかとを かしこくも さためたま
ひて かむさふと いはかくれます やすみし、 わかおほきみの き
こしめす そどものくにの まきたつ ふはやまこえて こまつるき
わさみかはらの かりみやに あもりいまして あめのした をさめた
まひ をすくを さためたまふと とりかなく あつまのくにの み
いくさを めしたまひて ちはやふる ひとをやはせと まつろはぬ
くにをさめにと みこなから まけたまへは おほみ、に たちとり

おほし おほみてに ゆみとりわたし みいくさを あともしたまひ
 と、のふる つゝみの音は いかつちの 声ときくまで 吹なせる く
 たのおとも あたまたる とらかほゆると もろひとの おひゆるまで
 に さ、けたる はたのなひきは 冬こもり はるさりくれば 野こと
 に つきてある火の 風のむた なひけることく 取もてる ゆはすの
 さわき み雪ふる 冬の林に 嵐かも いまきわたると おもふまで
 き、のかしこく 引はなつ 矢のしけ、く おほ雪の みたれてきたれ
 まつろはす たちむかひしも つゆしもの けなはけぬへく ゆくと
 りの あらそふはしに わたらひの いつきのみやゆ かんかせに い
 ふきまとはし 天雲を ひのめも見せず とこやみに おほひたまひて
 定めてし みつほのくにを かなながら ふとしきまして やすみ
 し、 わかおほきみの あめのした まをしたまへは 万代に しかし
 もあらんと ゆふはなの さかゆるときに わかおほきみ みこのみか
 とを かんみやに よそひまつりて つかはし、 みかとの人も しろ
 たへの あさころもきて はにやすの みかとのはらに あかねさす
 日のくる、まで し、しもの いはひふしつ、 ぬはたまの 夕になれ
 は おほとのを ふりさけみつ、 うつらなす いはひもとほり さも
 らへと さもらへかねて はるとりの さまよひぬれば なけきも い
 またすきぬに おもひも いまたつきねは ことさへく くだらの原ゆ
 かんはふり はふりいまして 朝もよし きへのみやを とこみや
 と さためまつりて かむながら しつまりましぬ しかれとも わか
 おほきみの 万代と おもほしめして つくらしし かくやまのみや
 よろつよに すきむともへや あめのこと ふりさけ見つ、 たまたす
 き かけてしぬはん かしこかれとも
 31 久かたのあめしらしぬる君ゆゑに 月日もしらにこひわたるかも
 32 はにやすの池のつゝみのこもりぬの ゆくへをしらにとねりはまとふ
 33 ふる雪はあはになふりそよなはりのぬかひのをかのせきならなくに
 やすみし、 わかおほきみ たかひかる ひのみこ 久かたの あまつ
 34 みやに 神なから かみといませは そこをしも あやにかしこみ ひ
 るはも 日のくる、まで 夜はも よの明るきはみ ふしむなけ、と

あきたらぬかも
 35 おほきみはかみにしませは天雲のいほへかしたにかくりたまひぬ
 36 さ、なみのしかさ、れなみしく／＼につねにと君かおもほせりける
 37 あまとふや かるの道は わきもこか 里にしあれば ねもころに見
 まくほしけと やますゆかは 人めをおほみ まねくゆかは 人しりぬ
 へみ さねかつら 後もあはんと 大ふねの おもひたのみて かきろ
 ひの いはかきふちの こもりのみ こひつゝあるに わたるひのく
 れぬるかこと 照月の 雲かくること おきつもの なひきしいもは
 もみちはの すきていにしと たまつさの つかひのいへは あつさゆ
 み おとにき、て いはんすへ せんすへしらに おとのみを き、て
 ありえねは わかこふる ちへのひとへも なくさもる 心もあれやと
 わきもこか やます出みし かるのいちに わか立きけは たまたす
 き うねひの山に なくとりの おともきこえず たまほこの みちゆ
 くひとも ひとりたに にてしゆかねは すへをなみ いもかなよひて
 袖そふりつる
 38 あきやまの紅葉をしけみまとはせる 妹をもとめんやまちしらすも
 39 紅葉、のちりぬるなへに玉つさの つかひを見ればあへるひおもほゆ
 うつせみと 思ひしときに たつさへて わかふたり見し はしりての
 40 つゝみにたてる つきの木の こち／＼のえの はるのはの しけき
 かことく おもへりし いもにはあれと たのめりし ころにはあれと
 世の中を そむきしえねは かきろひの もゆるあらぬに 白妙の
 あまひれかくり とりしもの あさたちいまして 入日なす かくりに
 しかは わきもこか かたみにおける みとり子の こひなくことに
 とりあたふ ものしなれば をとこしもの わきはさみもち わきも
 こと ふたりわかねし 枕つく つまやのうちに ひるはも うらさひ
 くらし よるはも いきつきあかし なけ、とも せんすへしらに こ
 ふれとも あふよしをなみ おほとりの はかひのやまに わかこふる
 いもはいますと ひとのいへは いはねさくみて なつみこし よけ
 くもそなき うつせみと おもひし妹か かきろひの ほのかにたにも
 みえぬおもへは

- 41 こそみてし秋の月夜はてらせとも あひみし妹はいやとしさかる
- 42 ふすまちを引手の山に妹をおきて やまちを行はいけりともなし
- 43 秋山の したふるいも なよたけの とをよるこらは いかさまに
おもひをれか たくつぬの なかき命を つゆこそは 朝におきて 夕
には きゆといへ きりこそは ゆふへに立て あしたには うすとい
へ あつさゆみ おとさくわれも ほのみしこと くやしきを しまった
への 手枕まきて つるきたち みにそへねけん わか草の そのつま
のこは さふしみか おもひてぬらん ときならず すきにしこらか
朝露のこと 夕きりのこと
- 44 さ、なみのしかつのこらかまかりちの かはせのみちをみればさふし
も
- 45 そらかそふおほつのかあひし日に おほにみしかはいまそくやしき
たまもよし さぬきのくには くにからか みれともあかぬ かんから
か こ、た、ふとき あめつち ひつきと、もに たりゆかん かみの
みおもと つきてくる なかのみなとゆ ふねかけて わかこきくれば
ときつかせ くもゐにふくに おきみれば しきなみたち へたみれ
は しらなみさはく いさなとり うみをかしこみ ゆくふねの ち
引をりて をちこちの しまはおほけと なくはし さみのしまの あ
りそわに いほりてみれば なみのとの しけきはまへを したたへの
まくらにまきて あらとこに ころふすきみか いへしらは ゆきて
もつけむ つましらは きもとはましを たまはこの みちたにしらす
おほ、しく まちかこふらん はしきつまらは
- 47 つまもあらはとりてたけましましさみのやま ぬのへのうはきすきにけら
すや
- 48 おきつなみきよるありそをしきたへの まくらとまきてなせる君かも
かもやまのいはねしまけるわれをかも しらすにいもかまちつ、あら
ん
- 49 けふく〜とわかまつ君はしかはのかひにましりてありといはすやも
- 50 三上卷
- 51 おほきみはかみにしませはあまくもの いかつちのうへにいほりせる
- 52 やすみしし わかおほきみ たかひかる 日のみこの うまなへて
みかりた、せる わきもこを かりちのをぬに し、こそは いはひを
ろかめ うつらこそ いはひもとほれ し、しもの いはひをろかみ
うつらなす いはひもとほり かしこみと つかへまつりて ひさかた
の あめみるこどく まそか、み あふきてみれと はる草の いやめ
つらしき わかおほきみかも
- 53 久かたのあめゆく月をつなにさし わかおほきみはきぬかさにてり
- 54 みつのさきなみをかしこみこもりえの ふねこく君かゆくかぬしまに
- 55 たまもかるみぬめをすきて夏草の ぬしまかさきにふね近づきぬ
- 56 あはちのぬしまかさきのはま風に いもかむすひしひもふきかへす
あらたへのふちえのうらにす、きつる あまとかみらん旅行我を
- 57 いなひぬもゆきすきかてにおもへれば こ、ろこひしきかこのしまみ
ゆ
- 58 ともしひのあかしのおとにいらん日や こきわかれなんいへのあたり
みす
- 59 あまさかるひなのなちゆこひくれは あかしのとよりやまとしまみ
ゆ
- 60 けひのうみにはよくあらしかりこもの みたれ出るみゆあまのつり
ふね
- 61 やすみし、 わかおほきみ たかひかる ひのみこ しきます おほ
との、へに 久かたの あまつたひくる 雪しもの ゆききつ、ませ
よろつよまでに
- 62 やつり山木たちもみえすふりみたる ゆきはたらなるあしたたぬしも
- 63 もの、ふのやそうちかはのあしろ木に いさよふ浪の行へしらすも
- 64 あふみのみゆふなみちとりなかなければ 心もしぬにいにしへおもほゆ
なくはしきいなみのうみのおきつなみ ちへにかくりぬやまとしまね
は
- 65 おほきみのとほのみかと、ありかよふ しまとをみれば神代しおもほ
ゆ
- 66
- 67

三下卷

- 68 くさまくらたひのやとりにたかつまか 国わすれたるいへまたなくに
 69 やまの間ゆいづものこらはきりなれや よしぬのやまのみねにたなひ
 70 みくまのゝうらのはまゆふもゝへなす 心はもへとたゝにあはぬかも
 71 いにしへにありけんひとわかことか いもにこひつゝいねかてにけ
 72 いまのみのわさにはあらすいにしへの ひとそまさりてなきさへなき
 73 もゝへにもきおよへかもとおもへかも 君かつかひのみれとあかさ
 74 をとめらか袖ふるやまのみつかきの ひさしき時ゆおもひきわれは
 75 なつぬ行をしかのつぬのつかのまも いもか心をわすれておもへや
 76 たまきぬのさぬくしつみ家のいもに 物いはすまておもひかねつも
 77 あめのうみに雲のなみたち月のふね星のはやしにこきかくるみゆ
 78 あなしかはかはなみ立ぬまきむくのゆつきかたけに雲ゐたつらし
 79 足引のやまかはのせのなるなへにゆつきかたけに雲立わたる
 80 なるかみのおとのみきゝしまきむくのひはらのやまをけふみつるかも
 81 みもろのそのやまなみにこらかてをまきむくやまはつきのつきのよろ
 82 わか衣色にそめなんうまさけをみむろの山は紅葉しにけり
 83 まきむくのあなしのかはゆ行水のとゆることなくまたかへりみん
 84 ぬは玉のよるさりくれはまきむくのかはとたかしもあしかもとき
 85 いにしへありけんひとわかことくみわのひはらにかさしをりけん
 86 ゆくかはのすきにし人のたをらねはうらふれたてりみわのひはらは

羈旅

- 87 あひきするあまとやみらんあくらのきよきありそをみにこし我を
 88 おほなむちすくなみかみのつくらしいもせのやまをみらくしからも
 89 わきもこかみつゝしぬはんおきつものはなさきたらはわれにつけこそ
 90 君かためうきぬの池のひしとるとわかせめし袖ぬれにけるかも
 91 いもかためすかのみとりにゆくわれをやまちまとひてこの日くらしつ
 92 とほくありて雲ゐにみゆるいもかいへにはやくいたらんあゆめ黒こま
 93 たちのしりはやにいりぬにくす引わきも
 94 すみのえのなみつまきみかうまのり衣
 95 すみのえのいてみのはまのしはなかりそね
 96 すみのえのを田をからすこやつこかもなき
 97 いけのへのをつきかもとのしぬなかりそね
 98 あめなるひめすかはらの草なかりそね
 99 なつかけのねやのしたにきぬたつわきも
 100 あつさゆみひきつのへなるなのりそのはな
 101 うち日さすみやちをゆくにわかもはやれぬ
 102 君かためたちからつかれおりたるきぬを
 103 はしたてのくらはしやまにたてる白雲
 100 つむまてにあはさらめやものりそのはな
 101 たまのをのおもひしなえていへにあらましを
 102 はるさらはいかなる色にすりてはよけん
 103 みまくほりわかするなへにたてるしらくも

- 104 はしたてのくらはしかはのいはのはしはも
をかさりにわかたりしいはのはしはも
- 105 はしたてのくらはしかはのかはのしつすけ
わか、りてかさもあますかはのしつすけ
- 106 はるひすらたにたちつかるきみはかなしも
わか草のつまなきみかたにたちつかる
- 107 やましろのくせのやしろのくさなたをりそ
おのかときとたちさかゆともくさなたをりそ
- 108 あをみつらよさみのはらにひとあはぬかも
いは、しるあふみあかたのものかたりせん
- 109 みなとのあしのうらはをたれかたをりし
わかせこかふるてをみるとわれそたをりし
- 110 かきこゆるいぬよひこしてとかりする君
あをやまのはしけやまへうまやすめ君
- 111 わたのそこおきつ玉ものなのりその花
いもとあれとこ、にありとなりのりその花
- 112 このをかにくさかるをのこしかなかりそね
ありつ、も君かきまさんみまくさにせん
- 113 えはやしにふせるししやもとむるによき
しろたへの袖にまきあけてしまつわかせ
- 114 あられふりとほつ遠江のあとかはやなき
かれ、とも又もおふてふあとかはやなき
- 115 朝つく日むかひのやまにつきたてるみゆ
とほつまをもちたるひとしみつ、しのはん
- 116 寄衣
あたらしきまたらの衣おもつきて われにおもほゆいまたきねとも
- 117 紅にころもそめまくほしけとも きて匂は、や人のしるへき
- 118 ちなにはも人はいふともおりつかん わかはたもの、しろきあさころも
- 119 あちむらのとをよるうみにふねうけて 白玉とらん人にしらゆな
- 120 をちこちのいそのなかなるしら玉を 人にしらすみんよしもかも
- 121 わたつみのてにまきもたる玉ゆゑに いそのうらわにかつきするかも
わたつみのもたる白玉みまくほり ちたひそのりしかつきするあま
- 122 かつきするあまはのれともわたつみの 心しえねはみゆといはなくに
あま雲のたなひく山のこもりたる わかした心のはしるらん
- 123 みれとあかぬひと国やまのこのはをし わか心からなつかしみ思ふ
- 124 寄花
このやまのもみちの枝のしたの花を はつく、にみてかへるおもほゆ
- 125 寄川
このかはゆふねはゆくへくありといへと わたりせことにまもる人ある
- 126 を
- 127 寄海
おほうみをまもるみなとにことしあらは いつへゆ君かわをあしのかん
かせふきてうみはあるともあすといは、 ひさしかるへしきみかまに
- 128 雲かくるこしまのかみのかしこけは めはへたつれと心へたてや
九卷
(二行空白)
- 129 130 131 132 133 134 135
かはのせのたきるをみれば玉もかも ちりみたれたるこのかはとかも
ひこほしのかさしの玉のつまこひに みたれにけらしこのかはのせに
しらとりのさきさかやまのまつかけに やとりてゆかなよもふけ行を
あふりほす人もあれやもぬれ衣を いへにはやらな旅のしるしに
ありそへにつきてこくあまからひとの はまをすくれはこひしくあるな
り
- 136 たかしまのあとかはなみはさわけとも われは家思ふやとりかなし
旅なればよなかをさしててる月の たかしま山にかくらくをしも
- 137 わかこふるいもはあはさすたまのうらに 衣かたしきひとりかもねん
- 138 たまくしけあけまくをしきあたらよを 衣手かれてひとりかもねん
- 139 たくひれのさきさかやまのしらつ、し われに匂はねいもしめさん
- 140 いもか、といりいつみかはのとこなめに みゆきのこれりいまた冬かも
- 141 衣手のなきのかはへの春雨に われたちぬるといへもふらんか
- 142

143 家人のつかひなるらし春雨の よくれとわれをぬらすおもへは

144 あふりほす人もあれやも いへひとのはるさめすらをまつかひにする

145 おほくらのいりえとよむなりいめひとの ふしみか田るにかりわたるら
し

146 秋風にやまふきのせのとよむなへ あま雲かけるかりにあへるかも

147 さよなかと夜はふけぬらしかりかねの きこゆる空に月わたるみゆ

148 いもかあたりしけきかりかね夕きりにきなきて過ぬともしきまてに

149 雲かくりかりなくときは秋山の 紅葉かたまつときはすくれと

150 うちたをりたむの山きりしけみかも ほそかはのせに浪のさわける

151 冬こもりはるへをこひてうゑし木の みになるときをかた待我そ

152 ぬは玉のよきりは立る衣手を たかやの上になひくまてに

153 やましろのくせのさきさかかみよ、り 春は、りつ、秋は散けり

154 はる草を馬くひやまゆこえくなる かりのつかひはやとりすく也

155 みけむかふみなふちやまのいはほには ふれるはたれかきえのこりたる
右柿本朝臣人麻呂之歌集所出
(二行空白)

156 いにしへのかしこきひとのあそひけん よしぬのかはら見れとあかぬか
も

題簽 「萬葉集山部赤人歌」 (表紙・中央)

萬葉集山部宿禰赤人歌

三上卷

1 あめつちの わかれし時ゆ かんさひて たかくたふとき するかなる

ふしのたかねを あまのはら ふりさけみれば わたるひの かけも

かくろひ てるつきの ひかりもみえず しらくも、 いゆきは、かり

ときしくそ ゆきはふりける かたりつき いひつきゆかん ふしの
たかねは

反歌

2 たこのうらゆうちて、みれはましろにそ ふしのたかねにゆきはふり

ける

3 なまゆみの かひのくに うちよする するかのくにと こちこちの

くにのみなかゆ いてたてる ふしのたかねは 天雲も いゆきは、か
りとふとりも とひものほらす もゆるひを ゆきもてけち ふるゆ

きを ひもてけちつ、 いひもえす なつけもしらに あやしくも い

ますかみかも せのうみと なつけてあるも そのやまの つ、めるう

みそ ふしかはと ひとのわたるも そのやまの みつのたきちそ ひ

のものやまの やまとの国の しつめとも いますかみかも たからとも

なれるやまかも するかなる ふしのたかねは みれとあかぬかも

4 反歌 右壹首高橋連蟲麻呂哥謨コ、二出ス

4 ふしのねにふりおけるゆきはみなつきの もちにけぬれはそのよふり

けり

5 ふしのねをたかみかしこみあまくも、 いゆきは、かりたなひくもの
を

6 すめろきの かみのみことの しきます くにのことく ゆはしも

さはにあれとも しまやまの よろしき国と こ、しかも いよのたか

ねの いさにはの をかにた、して うたしぬひ ことしぬひせし み

ゆのうへの こむらをみれば おみのきも おひつきにけり なくとり

の こゑもかはらす とほきよに かんさひゆかん いてましところ

7 反哥

7 も、しきのおほみやひとのきたつに ふなのりしけんとしのしらな
く

8 みもろの かみなひやまに いほえさし し、におひたる つかのきの

いやつきくに 玉かつら たゆることなく ありつ、も つねにか

よはん あすかの ふるきみやこは やまたかみ かはとほしろしは

るの日は やましみかほし 秋の夜は かはしきやけし あさ雲に た

つはみたれ 夕きりに かはつはさわく みることに ねのみしなかゆ
いにしへおもへは

反哥

9 あすか、はかはよとさらす立きりの おもひすくへきこひならなくに

三下巻

- 10 なはのうらゆそかひにみゆるおきつしま こきたむふねはつりせすら
しも
- 11 むこのうらをこきたむをふねあはしまを そかひにみつゝともしきを
ふね
- 12 あへのしまうのすむいそによるなみの まなくこの比やまとしおもほ
ゆ
- 13 しほひなはたまもかりつめいへのいもか はまつとこはゝなにをしめ
さん
- 14 秋かせのさむき朝けをさぬのをか こえなん君にきぬかさましを
- 15 みさこるいそまにおふるなのりその なはのらしてよおやはしると
も
- 16 はるひを かすかの山の たかくらの みかさのやまに あさゝらす
雲あたなひき かほとりの まなくしはなく くもあなす こゝろいさ
よひ そのとりの かたこひのみに ひるはも ひのことゝよるは
も よのことゝ たちてゐて おもひそわかする あはぬこゆゑに
- 反歌
- 17 たかくらのみかさの山になくどりの やめはつかるゝこひもするかも
- 18 いにしへのふるきつゝ、みはとしふかみ いけのなきさにみくさおひに
けり
- 19 わかやとにからあるまきおほしかれぬれと こりすてまたもまかんと
そ思
- 20 いにしへに ありけんひとの しつはたの おひときかへて ふせやた
て つまとひしけん かつしかの まゝのてこなか おくつきを こゝ
とはきけと まきのはや しけりたるらん まつかねや とほくひさし
き ことのみも なのみもわれは わすらえなくに
- 反哥
- 21 われもみつひとにもつけんかつしかの まゝのてこなかおおくつき処
- 22 かつしかのまゝのいりえにうちなひく たまもかりけんでこなしおも
ほゆ

六巻

- 23 やすみしし わかおほきみの とつみやと つかへまつれる さひかぬ
ゆ そかひにみゆる おきつしま きよなきさに かせふけは しら
なみさわき しほひれは たまもかりつゝ、かみよゝり しかそたふと
き たまつしまやま
- 反哥
- 24 おきつしまありそのたまもしほひみち いかくろひなはおもほえんか
も
- 25 わかのうらにしほみちくれはかたをなみ あしへをさしてたつなきわ
たる
- 26 やすみしゝ、わこおほきみの たかしらす よしぬのみやは たゝなつ
く あをかきこもり かはなみの 清きかふちそ はるへは はなさき
をゝり 秋されは きりたちわたる そのやまの いやますゝに こ
のかはの たゆることなく も、しきの おほみやひとは とはにかよ
はん
- 反哥
- 27 みよしぬのきさやまのまのこぬれには こゝたもさわくどりのこゑか
も
- 28 ぬは玉のよのふけゆけはひさきおふる きよきかはらにちとりしはな
く
- 29 やすみしし わかおほきみは みよしぬの あきつのをぬの ぬのへ
には とみすゑおきて みやまには いめたてわたし 朝かりに しゝ
ふみおこし 夕かりに とりふみたて うまなめて みかりそたゝす
はるのしけぬに
- 反哥
- 30 あしひきのやまにも野にもみかり人 さつやたはさみゝたれたるみゆ
あめつちの とほきかことく 日月の なかきかことく おしてる な
にはのみやに わこおほきみ くにしらすらし みけつくに ひのみつ
きと あはちの ぬしまのあまの わたのそこ おきついくりに あは
ひ玉 さはにかつきて ふねなめて つかへまつるか たふときみれは

反哥

32 あさなきにかちのときこゆみけつづくに ぬしまのあまのふねにしある
らし

33 やすみしし わかおほきみの かんながら たかしらしぬる いなみぬ
の おほうみのはらの あらたへの ふちゐのうらに しひつると あ
まふねさわき しほやくと ひとそさわなる うらをよみ うへもつり
はす はまをよみ うへもしほやく ありかよひ みますもしるし き
よきしらはま

反哥

34 おきつなみへなみしつけみいさりすと ふちえのうらにふねそさわけ
る

35 いなみぬのあさちおしなへさぬるよの けなかくしあれはいへししぬ
はよ

36 あかしかたしほひのみちをあすよりは したゑましけんいへちかつけ
は

37 あちさはふ いもかめしはみすて きたへの まくらもまかす かに
はまき つくれるふねに まかちぬき わかこきくれは あはちの ぬ
しまもすき いなみつまから にのしまの しまのまゆ わきへをみれ
は あをやまの そこともみえず しらくも、 ちへになりきぬ こき
たむる うらのことく ゆきかくる しまのさきく くまもおかす
おもひそわかくる たひのけなかみ

反哥

38 玉もかるからにのしまにあさりする うにしもあれやいへもはさらん
39 しまかくりわかこきくれはともしかも やまとへのほるまくまぬのふ
ね

40 かせふけは浪かた、んとさもらふに つたのほそえにうらかくれをり
41 みけむかふ あはちのしまに た、むかふ みぬめのうらの おきへに
は ふかみるおふる うらまには なのりそかる ふかみるの みまく
ほしけと なのりその おのか名をしみ まつかひも やらすてわれは
いけりともなし

反哥

42 すまのあまのしほやききぬのなれなはか ひと日も君をわすれておも
はん

43 ますらをはみかりにた、しをとめらは あかもすそひくきよきはまへ
を
44 やすみしし わかおほきみの みしたまふ よしぬのみやは やまたか
み 雲そたなひく かははやみ せのとそきゆき かんさひて みれは
たふとく よろしなへ みれはさやけし このやまの つきはのみこそ
このかはの たえはのみこそ も、しきの おほみやところやむと
きもあらめ

反哥

45 神よ、りよしぬのみやにありかよひ たかしらせるはやまかはをよみ
卷八

46 はるの、にすみれつみにとこしわれそ 野をなつかしみひとよねにけ
る

47 あしひきの山さくらはな日ならへて かくさきたらはいたもこひめや
も

48 わかせこにみせんとおもひしうめのはな それともみえずゆきのふれ、
は

49 あすよりはわかかなつまんとしめしぬに きのおもけふも雪のふれ、は
50 くらぬのはきのふるえにはるまつと をりしうくひすなきにけんか
も

51 こひしけはかたみにせんとわかやとに うゑしふちなみいまさかりな
り

卷十七

52 あしひきのやまたにこえてのつかさに いまやなくらんうくひすのこ
ゑ

注

- (1) 藤田洋治・朝比奈英夫「近世期の人麻呂・赤人の一面——河野美術館蔵『柿本朝臣・山部宿禰歌集』について——」(『東京成徳短期大学紀要』第四六号、平成二五年三月)
- (2) 佐佐木信綱『万葉集事典』(『典籍篇』(平凡社、昭和三十一年))
- (3) このように歌仙としての入麿・赤人からの脱却を志向する流れの一方で、伝説の中の歌人像を尊重する態度もまた継承されている。その例を二つ紹介したい。一つは国文学研究資料館「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」で見られる『歌仙三家集』である。当該歌集を紙焼きによって確認すると、題簽に『歌仙三家集』(左、刷、双辺)とあり、見返中央には「歌仙三家集 全」、右に「柿本人麿、山邊赤人、猿丸大夫」と歌人名が書かれ、その下に、「和歌の道をあふかむ人々は必此文を見給ふべきなり人丸集の中に日本六十余国を隠題として詠る哥六十六首あり定家卿も殊に見習ふべき文なりとの給へり」とある。左には、書肆が刊本「歌仙家集」十五巻からこの三家集を抽出したこと、出来れば全部を読むべきことを記し、「平安書肆 文政堂発兌」と見える。刊記に発行年時は記されないが、「皇都書林 寺町通四条南へ入町／藤井文政堂／山城屋左兵衛」と書肆名が見え、江戸末期の刊行と考えられる。歌集の内容は、正保四年刊『歌仙家集』十五巻から三家集だけを取り出したものだが、古今集仮名序に見える入麿、赤人に並んで、真名序に挙げられている猿丸大夫を取り上げているのは、やはり古今集尊重の伝統的な和歌観によるものといえよう。紹介するもう一つの例は、東北大学附属図書館狩野文庫本『入麿赤人集』(狩4 10640)で、入麿集、赤人集とも歌仙家集系統の本文である。書肆を簡略に示すと、所収歌は『柿本集』が二九九首、赤人集が二四七首で、流布本に一致。おおよそ江戸末期の写本と思われる、表紙には『入麿赤人集』と打ち付け書に外題が記される。一面行数は一一行、柿本集に奥書がないものの、一面行数が一致するので、版本と同じ場所に該当する和歌が並び、仮名表記や漢字使用、また空白部分などにも共通点が見られ、詞書や左注、ま
- た長歌の改行位置なども一致しているので、ともに版本の写しと判断される。
- (4) 齋藤正一『庄内藩』(吉川弘文館・平成二年一〇月刊)。及び松田二郎『廉女詠 草釈考』(『廉女詠草』刊行会・平成四年四月刊)
- (5) 佐藤東蔵『佐藤東蔵家系譜』(鶴岡印刷・昭和五八年六月刊)。湯川真人「近世後期庄内地域・名主佐藤家の書物ネットワークに関する一考察」『五峯館蔵書』と『書籍貸預記并書物注文代記』を中心に(『一橋大学リポジトリ』平成一九年一〇月)。
- (6) 『五峯館蔵書』は明治二七年に作成されたものは現存しないが戦前の手書きの目録、及び庄内資料調査会が昭和三二年に『角田二口文書目録』として作成されている。なおその中に『万葉略解』は掲載されていないが、貸し出しの記録に見えるので、所蔵されていたと考えられる。
- (7) 注(5)の湯川真人氏に同じ。
- (8) 伝本に関して、鶴岡市郷土資料館今野章氏のご指示による。箱は六点現存し、『論語二』、『詩材三』、『文林四』、『国学七』、『六経十』などと箱の内容と番号が示される。
- (9) 以下、本集の本文と『略解』の訓を対照し両者の関係を述べるが、本文のほかに、巻三が上下に分かれている点も両者の共通項として指摘しうる。『略解』は巻三の336番歌以降を「巻三下」と分割するが、本集も325番歌が上巻(赤人9)、357番歌が下巻(赤人10)に排されており一致する。『略解』の影響を示唆する好例といつてよい。
- (10) 品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』(新曜社・二〇〇一)
- (11) 羽田春埜「高梨の家」(『折口信夫回想』中央公論社・一九六八)
- (12) 前掲(10)
- (13) 澤瀉久孝「菅家萬葉集の和歌の用字に就いて」(『菅公頌徳録』京都北野天満宮・一九四四)
- (14) 近世中期以降に広く流布した『書言字考節用集』に「黄葉」、「黄変」の表記があるように、『萬葉集』の書き様もある程度認知はされていたようだが、「紅葉」の方が通行していたことはたしかである。

附記

この論文は、科学研究費補助金（基盤研究C）「平安時代における『万葉集』訓読本文の研究——人麿集を中心として」（課題番号26370217）研究代表者 京都光華女子大学キャリア形成学部教授 朝比奈英夫）の成果の一部である。